

佳作

ピンチはチャンス

福島大学附属中学校

3年 猪狩 結斗

拍手と歓声が沸き起こっている。応援してくれた友達や後輩と満面の笑みでハイタッチを交わした。試合は終わった。そう、僕は勝ったのだ。こうして、僕の中学校部活動は、歓喜の中、幕を閉じた。

さかのぼること4カ月、僕は失意のどん底を味わった。僕はソフトテニス部に所属している。

学校での練習は休みなく参加してきたが、「プロテニス選手になりたい」なんて大それた夢は持ち合わせていない。僕は何となくテニスをしていた。

2年生の3月、そろそろ中体連に向けた附属中のメンバーが決まる頃だ。「きっと、自分も団体戦メンバーに選ばれるだろう」と期待に胸を膨らませて発表を心待ちにしていた。その日は、突然やってきた。

「次の大会の団体戦のメンバーを発表する。」

顧問の先生の口からその言葉が出たとき、部員全員に緊張が走るのがわかった。先生が次々と名前を呼びあげていく。今まで団体戦メンバーに入っていなかった友達も名前を呼ばれていった。だが、その中に僕の名前はなかった。

僕のショックは大きかった。帰りのバスでは、友達と話す気力もなく、ただ茫然と窓の外を見ているしかなかった。

「次の大会」になり、僕はサポート要員として、団体戦の試合の応援に行った。8人がコートの中で並び、試合が始まった。僕はコートの外から観ることしかできなかった。

2週間前までは、自分とほとんど実力が変わらないと思っていた友達は、青いユニフォームをまとい、選手として活躍していた。

すごく悔しかった。自分に油断する甘い気持ちがあったのではないか。何となくテニスをしてきたことを悔やんだ。それと同時に、「このままで終わっていないのか。いいはずがない。絶対に負けないで、挽回してやる。」という熱い思いが込み上げてきた。この思いが僕にとっての「挑戦」の始まりだった。

僕の目標は「誰からも認められる団体戦メンバーになる」ことだ。

僕の猛練習が始まった。テニス経験者の父に基本から教えを請うことにした。

母は

「ピンチはチャンスだよ。」

と励ましてくれ、日に何度も送迎をしてくれた。

具体的には、皆が苦手とするバックハンドを自分の武器にするため、自宅の塀で壁打ちを何百回も徹底的に練習した。

また、得意の変化球カットサーブは精度を上げる練習をした。応援席では、声出しや仲間のサポートにも今まで以上に力を入れた。

こうして、来る日も来る日も、雨の日も、塾の日も、もちろん休日も練習にあけくれた。

そんな日々が続いた。とうとう、僕にチャンスが回ってきた。正確には、中体連団体戦メンバーを勝ち取るラストチャンスだ。

校内試合で最終的な中体連出場メンバーが決まる。試合の結果がそのまま評価になる。

2日間にわたって行われた。1日目は僕が思う理想の「強い人」が相手だった。ボロ負けだったが「明日がある。そこで2勝できれば可能性はある。」この結果を前向きに捉える自分がいた。2日目は、2戦2勝することができた。今までの練習は、無駄ではなかった。

なにより、練習することによって自信がつき強気で攻めのプレーができるようになった。

「3位、猪狩結斗。」

メンバーに選ばれ、名前を呼ばれた時、僕は歓喜した。あの日悔しくて仲間の背中を見ていただけの僕は、もういない。これからは、憧れていた団体戦のメンバーとして、附属中の名を背負い戦うことになる。責任感を持って頑張ろうと誓った。

僕たちは県北大会を2位で通過して県大会に進出した。県大会出場は快挙とのことだ。

そしていよいよ、冒頭に記した僕にとって中学生最後の試合が行われた。

相手の中学校の練習を見ると、サーブが上手で正直勝てるかわからなかったが、集中して思い切りプレーをしようと思った。サービスエースを決めることができた。ミスをして声も掛け合って、点を取り喜びを分かち合った。こんなにテニスが楽しいと思ったのは初めてだった。ゲームポイント、僕は相手の苦手なコースにシュートを打ち続けた。

「いい当たり」豪快な音が響いた。相手の打ち返したボールがラインを越えた。アウトだ。こうして勝利をつかんだ。

あの日諦めなくて良かった。僕は、テニスをとおして多くのことを学んだ。チームワークの大切さ、周囲への感謝、失敗しても、挑戦を怖がらずに続けることの大切さだ。ピンチはチャンスである。

僕は、これからも試練や困難を前向きに捉え、強い心で挑戦していきたい。僕の「チャレンジ」はまだまだ続いていく。